

あやまちの悲劇

ヘンリー・ジェイムズ 著

The Tragedy of Error

by Henry James

李 春 喜 訳
LEE Haruki

When literary critics discuss Henry James's works, they tend to mainly focus on James's later works that are stylistically very sophisticated and difficult to read. But in the early years in James's career, he writes a considerable number of short stories that are relatively easy to read.

Seymour Chatman points out in his *Story and Discourse* two types of narrative. One, a narrative with a resolved plot, and one with a revealed plot. According to his dichotomy, James's later works are defined as having "revealed plots" and his earlier works as having "resolved plots."

"The Tragedy of Error" was written in 1864 at the age of 21, one of his earliest works. This story deals with a woman named Hortense having an affair with one M. de Meyrau in her husband's absence. But in the beginning of the story, she learns that her husband will return soon after. She resolves to do away with her husband through a hired killer. At the end of the story, an ironic turn of events takes place, and it is her lover Meyrau who is robbed of his life. As you can see, this story is purely written for entertainment purposes. In other words, this is a story of a resolved plot. In his earlier career, James wrote many short stories with resolved plots in contrast to his later novels.

To date, the vast majority of James's translations consist of his later novels, dealing with revealed plot novels. However, by omitting his early resolved short stories, an enormous void of understanding remains. The purpose of this translation of this short story is to remedy this error and fill the void.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ)、Short Story (短編)、Translation (翻訳)
Revealed Plot (認識論的物語)、Resolved Plot (神話的物語)

I

イギリス製の低い二頭四輪馬車が、フランス港町の郵便局のドアの前で止まった。馬車の中にはベールで顔を覆い日傘を顔の近くに持った女性が座っていた。この物語は郵便局から出て来た男が手紙をその女性に手渡すところから始まる。

その男は馬車に乗り込む前にしばらく馬車のそばに立っていた。女性は持っているようにと男性に日傘を手渡しベールの覆いを上げた。女性は美しい顔立ちをしていた。この二人組は行き交う人々の関心を集めているようだった。通り過ぎる人の多くは厳しい目で彼らを見つめ、意味ありげな目くばせをするのだった。その場にいた人たちは、彼女の視線が手紙に向くと同時に顔色が変わるのを見た。彼女のそばにいた男性もそれに気づき、すぐに彼女のそばに近寄って馬車の手綱を取り、町の大通りを急いで駆け抜け、港を通り越して、海沿いの一般道へと向かい、そこでようやく速度を落とした。女性は再びベールを下ろし、手紙を膝の上に開いたまま後にもたれかかっていた。彼女はほとんど意識を失ったような状態で、男には彼女の目が閉じられているのが見えた。安心した彼は、急いで手紙を取り読み始めた。

サザンプトン 18××年7月16日

いとしいホーテンスへ

消印を見れば分かるように、前回の手紙から三千マイルも我が家に近づいたよ。しかし、なぜ急にこういうことになったのか説明する時間はほとんどないのだ。P——氏が突然思いもかけず休暇を出してくれたのだ。何か月も離れていたが、数週間いっしょに過ごすことができるだろう。何と慈悲深い神様だろう！私たちは今朝ニューヨークからここに着いた。そして、幸運なことにH——へ直接向かう「アルモリーク」という船を見つけたんだ。郵便物はすぐに届けられると思うが、潮の加減によって私たちは数時間待たなければならないだろう。私が到着する前日にこの手紙は君のところに届いていると思う。船長によると私たちは木曜日の朝早く着くことになりそうだ。ああ、ホーテンス！時間が経つのは何て遅いだろう！丸三日もだ！私がニューヨークから手紙を出さなかったのは、きっとそうだと思うのだが、君が待っている時間を長いと感じて、その待ち遠しさで君を苦しめたくなかったからなんだ。さようなら。会える日が待ち遠しいよ！

君を心から愛する

C. B

男が手紙を女性の膝の上に戻したとき、彼の顔色も彼女と同じくらい変った。一瞬、彼は前方の一点をぼんやりと眺めた。そして、押し殺したように言葉をはき捨て、それから視線を彼女の方に戻した。少しためらった後——その間に手綱を緩めてしまい馬が歩き出していた——

彼はやさしく彼女の肩に触れた。

「さあ、ホーテンス」と彼は愛想よく言った。「どうしたんだい？眠っちゃったのかい？」

ホーテンスはゆっくりと目を開けた。自分たちが町を後にしたことに気づくと彼女はボールを上げた。彼女の顔つきは恐怖でこわばっていた。

「これを読んでちょうだい」と開けたままの手紙を差し出して彼女は言った。

男は手紙を手に取り、もう一度読むふりをした。

「ああ！バーニャーさんが帰って来るんですね。それは楽しみだ！」と彼は言った。

「どうして楽しみだなんておっしゃるのかしら？」とホーテンスは言った。「こんな大変なときに冗談なんかおっしゃてる場合じゃないんじゃないかって。」

「その通りです」と男は言った。「それは大切な再会となるでしょうな。二年間もお会いになれなかったなんて大変なことです。」

「ああ！私はどんな顔をして会えばいいのか分かりませんわ」とホーテンスは突然涙を流した。

彼女は片手で顔を覆いながら、片方の手を男の手の方に伸ばした。しかし、彼は深く空想にふけていたので彼女の行為に気づかなかった。彼女の泣き声に彼は突然われにかえた。

「さあ、さあ」と彼は、危険を前にして自分も居心地悪く感じるが、相手がそれを気にしていないのを見ればそれで自分は安心するので、そんな危険など存在しないかのようになだめるような調子で言った。「彼が帰って来たところでどうだというんだい？彼は何も知る必要はないし、少しの間滞在するだけだろ。そして帰って来たときと同様何も疑わず再び出かけて行くのさ。」

「何も知らないですって！驚かさないで下さい。町の人が彼に『こんにちは』と挨拶するだけで、すべての秘密が明らかになりますわ。」

「ああ！君が考えているほど人は私たちのことなど気にしていないよ。僕たちだってそうだろう？僕たちだって他人の不品行を心配している時間などないよ。ねえ、程度の差はあっても他の人たちだって同じさ。船が座礁して木っ端微塵になって、浮かんでいる丸太にしがみついて陸にたどり着こうとしている人間は、波と格闘している他人になんか目もくれないよ。彼らの目は海岸に釘づけになっていて、彼らが考えるのは自分の安全だけさ。人生では私たちはみんな荒れた海を漂っているのさ。私たちはみんな富や愛や余暇といったどこか乾いた土地を目指してもがいているんだよ。波のうねりや私たちがけり上げる波のしぶきが目に入り、他人が言ったりしたりしていることは彼らには聞こえないし見えないんだよ。私たちが這い上がって乾いた所まで登ったとして、私たちは彼らのことを気にするかね？」

「ええ、でも登れなかったら？自分たちの望みを失ってしまったら、私たちは他の人たちを沈めたいと願うわ。彼らの首に錘をかけ、彼らに投げつけるための石を求めて汚れた水の中に飛び込むでしょう。あなたのご自分に向けられていない攻撃はお感じにならないのよ。町の人

がうわさするのはあなたのことではなくて私のことなのです。気の毒な女性があそこの棧橋から身を投げるのだわ。そして親切な方の手が彼女を救う前に溺れ死ぬのよ。彼女の遺体は水の上を漂い世間の目のさらしものになり、なぜこんなに人が集まっているだろうと彼女の夫が見に来るわ。そんなとき、奥様がお亡くなりになりましたという素晴らしいニュースを教えてくれる親切な友人に不足するとでも思っているの？」

「ホーテンス、女性が軽くて水に浮いているかぎり、その人は溺れ死んだとは思われませんよ。その女性が沈んで見えなくなったとき、皆は彼女をあきらめるのです。」

ホーテンスは腫れた目で海を見ながらしばらく黙っていた。

「ルイ」と彼女がついに言った。「私たちは比喩的に話をしていたのです。しかし、私は文字通り溺れ死ぬことを考えています。」

「バカな！」とルイは答えた。「告発された者は無実だと言い、そして牢の中で首を吊るものなのです。新聞は何と書きます？人々も話をするでしょう？彼らが話すように君も話せないのかい？黙りこくって戦うことを拒否した瞬間から女性は疑われるのです。そしてそれこそ君がよくやることだ。胸のハンカチーフは多かれ少なかれ常に休戦の旗印なんだよ。」

「分かりませんわ」とホーテンスは関心がなさそうに言った。「多分その通りなんだと思います。」

苦しみの原因になっているある種の側面が、その苦しみとはまったく関係のない事のように思える悲しみの瞬間というものがある。彼女の目はまだ海に釘づけになっていた。またしばらくの沈黙があった。「ああ、かわいそうなチャールズ！」と彼女はついにつぶやいた。「何という所にあなたは帰って来たのでしょうか！」

「ホーテンス」と、彼女が言ったことが聞こえなかったかのように男は言った。しかし、第三者には彼女の言ったことが聞こえたから彼が話をしているように見えただろう。「僕たちの秘密が絶対にばれないと考えているわけではないことを今さら君に言う必要はないと思うが、バーニャー氏が滞在している間は誰一人として僕たちのことを口にしないと保証するね。」

「何ですって！」ホーテンスはため息をついた。「十分で彼には分るでしょう。」

「ああ、それは」と彼女の連れの男はそっけなく言った。「それは君たちの問題だ。」

「ド・メイローさん！」とホーテンスは叫んだ。

男は続けた。「このことについては、私が先ほど請け負った保証で私の義務は果たしたと思うのだが。」

「あなたの義務ですって！」とホーテンスはすすり泣いた。

ド・メイロー氏はそれには答えなかったが、鞭を大きく振ると馬は道に沿って駆け出した。それ以上どちらも何も言わなかった。ホーテンスはうめき声を上げながらハンカチに顔をうずめ、馬車の背もたれにもたれかかっていた。ド・メイロー氏は眉に皺を寄せ、歯を固くかみ、まっすぐ前を見て背筋をのばして座っていた。そして、ときおり激しく鞭を打っては、猛スピ

ードで馬を駆けさせていた。歩いている人は彼のことを、抵抗するのに疲れ切った被害者と逃亡している誘拐犯と思ったかもしれない。彼らのことを知っている旅行者はこの偶然の類似性にたぶん深い意味を発見しただろう。それで、彼は迂回路を使って町に戻って来た。

ホーテンスは、自宅に着くと二階にある小さな自分の部屋にまっすぐ向かい、部屋に閉じこもった。この部屋は自宅の裏側にあり、そのとき、小さなボートの船着き場がある水場まで伸びている長い庭を歩いていた女中は、ホーテンスがボンネットもコートも脱がずに窓のブラインドを下ろし部屋を暗くするのを見た。ホーテンスは二時間ほど一人でいた。奥様の晩餐の身支度をするために呼ばれるいつもの時間が少し過ぎた五時に、女中はホーテンスのドアをノックしお手伝いを申し出たが、片頭痛がするので着替えは結構とホーテンスは部屋の中から伝えた。

「ハーブティーか何か温かいお飲みものをお持ちいたしましょうか、奥様？」とジョゼフィーヌは尋ねた。

「結構よ。何もいらわないわ。」

「奥様、お食事は？」

「いらわないわ。」

「奥様、何か召し上がらないとお体にさわれます。」

「ワインかブランデーを一本持って来てちょうだい。」

ジョゼフィーヌは言われたとおりにした。彼女が戻って来るとホーテンスは戸口に立っていた。ジョゼフィーヌが飲み物を取りに行っている間に窓のブラインドの一つが上げられていたので、帽子はソファの上に放り投げられていたが、コートはまだ身につけたままで、奥様の顔色が真っ青なのが見えた。ジョゼフィーヌはお加減が悪いのかどうか尋ねたり質問をしてはいけないような気がした。

ジョゼフィーヌはトレイを手渡ししながら、「まだ何かご入り用でしょうか？」と尋ねてみた。

ホーテンスは首を振りドアを閉めて鍵をかけた。

ジョゼフィーヌはどうしていいかわからず聞き耳を立てながらしばらくその場に立っていた。部屋の中からは何も聞こえなかった。ジョゼフィーヌはとうとう用心深く身をかがめると、鍵穴から中をのぞいた。

彼女には以下のような様子が目に入って来た：

奥様は開いた窓に近寄り背中をドアに向けて海を見ていた。体のそばに力なくぶら下がっている片手でボトルの首をつかみ、もう一方の手は、水が半分入ったグラスの上に置かれていた。そのグラスは彼女のそばのテーブルの上にあった。グラスの横には開かれたままの手紙が置かれていた。彼女はジョゼフィーヌが待ちくたびれてしまうまでそのままの姿勢でいた。しかし、ジョゼフィーヌが自分の好奇心を満たすのをあきらめようと立ち上がろうとしたとき、奥様はボトルとグラスを持ち上げてグラスを満たした。ジョゼフィーヌは一層熱心にのぞいて見た。

ホーテンスは一瞬グラスを光にかざしたあと、それを一気に飲み干した。

ジョゼフィーヌは思わず口笛をならすのを抑えることができなかった。しかし、彼女の驚きは奥様が二杯目を用意したとき動揺に変わった。奥様はグラスの中身が半分となくなる前に突然何かひらめいたようにグラスを置き、急いで部屋を横切った。彼女は戸棚の前にかがみ込み小さなオペラグラスを取り出した。彼女はそれを持って窓のところに戻りオペラグラスを目に当てると再び海の方をしばらく眺めていた。ジョゼフィーヌには奥様の行動の意味が分からなかった。結局、彼女が目にしたのは、奥様が突然オペラグラスをテーブルの上に置き、肘掛椅子に座り、両手で顔を覆うことだけだった。

ジョゼフィーヌはこの驚きを抑えることができなかった。彼女は急いでキッチンに戻った。

「バレンタイン」と彼女は料理女に言った。「いったい奥様はどうされたのでしょうか？夕食はお召し上がりにならないし、ブランデーをグラスに一杯飲まれて、少し前はオペラグラスで海の方を眺めておられたけれど、今は開いたままのお手紙を膝の上にのせてひどくお泣きになっています。」

料理女はポテトの皮むきから顔を上げて意味ありげにウィンクをした。

「ご主人様がお帰りになること以外に何か考えられるかね？」

II

ジョゼフィーヌとバレンタインは六時になっても一緒に座って、バレンタインによってほめかされた出来事について考えられる原因と結果について話し合っていた。突然、バーニャー夫人からのベルが鳴った。ジョゼフィーヌは大喜びでそれに答えた。ジョゼフィーヌは、奥様が動揺した様子をまったく見せずに、髪をとかしコートを着てベールを身につけて階段を降りて来るところに出会った。

「出かけて来ます」とバーニャー夫人は言った。「もし、ル・ヴィコンテ氏がお見えになったら、私はお義母さまのところにおり、私が戻るまでお待ちになっていただくよう望んでいたと伝えて下さい。」

ジョゼフィーヌはドアを開けて、奥様をお見送りし、彼女が中庭を横切って行くのを見ながら立っていた。

「お義母さまのところですって」とジョゼフィーヌはつぶやいた。「何という神経をしてらっしゃるんでしょう！」

ホーテンスは表通りに出たところで、町を通り抜けている道ではなくて、夫の母が住んでいる古い区域に続く道を進んだが、まったく違った方向に向かっていた。彼女は港のそばの波止場に沿った道を進み、主に漁師や船乗りたちが密集した地区に入っていた。ここにきて彼女はベールを上げた。夕暮れが迫っていた。彼女はできるだけ人目を避けるように歩いていたが、

彼女を中心として彼女の周囲にいる人たちを注意深く観察していた。彼女の服装はとても質素だったので彼女の外見には人目を引くようなものは何もなかった。しかし、もし通り過ぎる人が何らかの理由で彼女に気づくとしたら、それは行き交う人をせんさくする彼女の抑制された熱意だった。彼女の振る舞いは、長い間行方の分からなくなっていた友人、というよりもむしろ、長い間探し求めていた敵を人ごみの中で見つけようとする人のそれであった。とうとう彼女は一連の階段の手前で立ち止まった。そこは、船が通るために頭上のつり上げ橋が閉じられているとき、港の両側にお客さんを運ぶために雇われている六隻ほどの小さなボートが埠頭に寄せる場所だった。そこに彼女が立っている間、彼女は次のような光景を目にした。

赤い毛糸の漁師の帽子をかぶった男が海の方を向いて短く切ったパイプを吸いながら階段の上に座っていた。ちらっと目を横にやると、小さな男の子が水差しを腕にかかえながら近くのすすけた家屋に向かって波止場のそばを急いでいるのが目に止まった。

「おい、坊や！」と男は叫んだ。「何を運んでるんだ？ こっちへ来い。」

その少年は振り向いたが、言うことをきかずに歩みを速めた。

「悪魔にでも食われてしまえ。こっちへ来い！」と男は怒って繰り返した。「言うことをきかないとその汚らしい首根っこをひっちぎっちゃうぞ。おまえは叔父さんの言うことがきけないのか？」

少年は立ち止って、叔父さんの言うことを聞かなくてもいいと言ってくれる誰かに訴えるかのように家の方を数回見ながら悲しそうに叔父さんの方に歩いて行った。

「早く来い！」と男はしつこく言った。「それとも、俺が行ってひつつかまえてやろうか？ 来い！」

その子は階段を五、六歩上って、男を用心深く見ながら立ち止まり、水差しを強く抱いた。

「何をしてるんだ、この乞食野郎、こっちへ上がって来い。」

少年はポーッと黙っていたが、動かなかった。突然、その叔父と名乗る男は前かがみになって腕を伸ばすと日焼けした少年の手首をつかみ自分の方へ引き寄せた。

「呼ばれたらなぜすぐ来ないんだ？」と男は言った。男は片方の手を少年のだらしない髪の中に突っ込んで、ふらふらになるまで少年の頭を振り回した。「なぜ来なかった？ この礼儀知らずめ。答えろ！ 答えろ！ 答えろ！」と怒鳴りつける度に少年の頭を振り回すのだった。

少年は何も答えなかった。男に押さえつけられながらも首を回して、家の方に助けを求めようとするのだが無駄だった。

「おい、頭をまっすぐにしろ。こっちを見て答えろ。その水差しには何が入っているんだ？ 嘘を言うんじゃないぞ。」

「ミルクです。」

「誰のだ？」

「おばあさんのです。」

「婆さんなんか糞くらえだ。」

男は少年から手を離して少年が弱々しくつかんでいる水差しを奪い取って光の方に傾けると中身を確認して唇にあてて中身を飲み干してしまった。少年は自由にはなったが逃げなかった。男が牛乳を飲み干して水差しを下ろすまで立ったままじっと見ていた。そして、少年の目が男の目と合ったとき、少年は言った。

「それは赤ん坊のものなんです。」

一瞬男は何と言っていいのか分からなかった。少年はまだ子供だったが親の怒りというものを感じているかのようにみえた。というのも、少年はミルクが赤ん坊のものだと叫ぶやいなや後ろを振り返りあわてて走り去ったからだ。男が投げた水差しが当たるのをかろうじてまぬがれ、少年のすぐ後ろでそれはカランカランと音を立ててころがった。少年が見えなくなると、男は再び海の方に向き直り、歯の間のパイプは激しいしかめつつらとつぶやき声にとって代わられた。バーニャー夫人にはそのつぶやき声は次のように聞こえた。——「赤ん坊など息が詰まっちゃえばいいんだ。」

ホーテンスはこのちょっとしたドラマの無言の傍観者だった。そのドラマが終わったとき、彼女は振り返って、片手を頭にやりながら、来た道を二十ヤードほど引き返した。それから彼女はまっすぐに歩いて戻り、その男に話しかけた。

「すみません」と彼女はとても愛想よく言った。「ご主人はこのボートの一つの船長さんですか？」

男は彼女を見上げた。パイプが一瞬彼の口から離れ、彼はにやりと大きく笑った。彼は片手を帽子にあてて立ち上がった。

「何なりと奥さんのお役にたちますぜ。」

「あっちの岸へ連れて行って下さらない？」

「ボートなんていないよ。橋は閉じてるから」と階段の下にいる船乗り仲間の一人があっちの方向を見ながら言った。

「分かっております」とバーニャー夫人は言った。「私は墓地に行きたいのです。ボートで行けば半マイル歩かなくて済みます。」

「この時間じゃ墓地は閉まっていますよ。」

「おい、ご婦人のお好きなようにさせてあげたらどうだ」と最初に話かけられた男は言った。「奥さん、こちらへどうぞ。」

ホーテンスはボートの船尾に腰かけた。男はオールを手にした。

「まっすぐ行けばよろしいんで？」と彼は尋ねた。

ホーテンスはあたりを見回した。「気持ちのいい夕暮れだわ。灯台のところまで漕いで行っていただいて、帰りに墓地に一番近いところで降りしていただくというのはどうかしら？」と彼女は言った。

「おあい御用で。十五スーいただきます」と男は同意して、元気よく漕ぎ始めた。

「心配しないで。料金はきちんとお支払いします」とバーニャー夫人は言った。

「料金は十五スーです」と男は繰り返した。

「気持ちよくボートを漕いで下されば、百スーお支払いしましょう」とホーテンスは言った。

男は何も言わなかった。彼は明らかに彼女の言ったことが聞こえなかったふりをしていた。冗談ではないあまりにも気前のいい約束を信じるときの最も品位ある振る舞いは多分黙っていることだっただろう。

オールからしたたる水の音と、近くの海岸と船から聞こえる音にさえぎられる他は、しばらくこの沈黙は続いた。バーニャー夫人はボートを漕ぐ男の横顔をまじまじと眺めていた。彼は三五歳くらいで、意志が強く残酷で不機嫌な顔つきをしていた。これらの表情は退屈で単調な彼の仕事によって多分誇張されていた。彼の目には、仕事に追われているときに目に現れるある種の下品なひらめきがなかった。彼の顔つきは彼女をボートに乗せているときの方が良かった。つまり、悪意を持った顔つきの方が無知な顔よりも良いというようなことがあり得るならばということだが。私たちは笑顔のことを顔色が「明るく」と言う。事実、その一瞬の表情のひらめきが暗い部屋のろうそくの役目をするのである。そしてそれは、私たちの魂の薄暗い内張りに一条の光を注ぐのである。一般に、貧しい男の顔つきは表情に乏しいものである。宿命が表情の変化を一つに制限、あるいは多分、表情を一つに制限された階級に多くの人間がいるのだ。ああ、彼らの表情！何も表現しないか貧困だけを表す顔。彼らの休息は何の意味も持たず、彼らの行為は罪を犯すことであり、最悪の場合は何も知ることなく、最善の場合でもただ不名誉をもたらすだけの顔だ！

「あまり強く漕がないで」とホーテンスはとうとう言った。「一息入れた方が良くなって？」

「奥様は親切な方で」とオールにもたれて男は言った。「でも、奥さんが俺を時間で雇っていたら」と男は悪意のある笑みを浮かべて言った。「俺は休憩などせず目一杯働きますよ。」

「あなたはとてもよく働いています」とバーニャー夫人は言った。

男は、彼の仕事の程度を理解しているかのような彼女の発言の不適切さをほのめかすように少し頭を振った。

「今朝は四時から起きて、波止場で荷物や箱を運んでボートを酷使してるんでさ。五分の休憩もなしにね。そんな人生でさ。ときどき仲間に汗を乾かすために入り江にでも飛び込もうかと言うんでさ。はっはっはっ。」

「もちろん、それで少しはお稼ぎになるんでしょ」とバーニャー夫人は言った。

「ただより悪いくらいでさ。餓死しない程度の食料を買えるくらいでさ。」

「どうしてですか？必要な食事にも足らないのですか？」

「必要たあとても便利な言葉でさ、奥さん。必要最低限のことも必要ということですからね。そしてそれ以上は贅沢になるってことでさ。ときには薄い空気ですえ俺には必要な食事ってこ

とでさ。俺からそれが奪われないのは単にそれができないからさ。」

「そんな不幸ってあり得まして？」

「俺が今日何を食べたか教えてあげましょうか？」

「何をお食べになったの？」とバーニャー夫人は言った。

「この十二時間の間に俺の口を通ったのは、ひとかけらの黒パンと塩漬けのニシンだけでさ。」

「何かもっと良い仕事におつきになればよるしいのに。」

「今夜俺が死んじまうんなら」と、自分に対する哀れみの勢いのせいで救いの信号旗を見落としてしまった男のようにバーニャー夫人の質問を無視して男は続けた。「自分を埋葬する以外にどんな仕事がありますか？俺の着ているこの服で長い棺が買えるかもしれません。この古ぼけたスーツのお金じゃあ、半年と持ちゃあしません。千年着ても古びないスーツを買わなきゃいけませんな。こりゃいい考えだ！」

「どうしてもう少しお金になるお仕事をなさらないのです？」とホーテンスはもう一度尋ねた。

男は再びオールを水につけた。

「もっとお金になる仕事？俺は仕事のために仕事してるんでさ。仕事も稼がなきゃならないんです。仕事が賃金なんですよ。来週の仕事の約束が土曜の夜の最高のお小遣いなんです。船から樽を五十個倉庫に転がすことには二つ意味があるんです。三十スーと次の日にもう五十樽を転がすということだ。それで、手を傷めたり肩を痛めたりすると薬屋に二十フラン払い、この仕事とはおさらばでさ。」

「ご結婚なされているのですか？」ホーテンスは尋ねた。

「ありがたいことにしてません。その恩恵には呪われていません。しかし、年老いた母と妹と三人の甥っ子が俺の稼ぎを当てにしてまさあ。あの小娘ときたら怠け者で、甥っ子たちはまだ小さ過ぎるし、しかしまあ、奴らは歳が行き過ぎているか幼な過ぎて腹が空かんです。俺があれらみんなの父親じゃなければ、首をつってまさあ。」

一瞬沈黙があった。男は再びボートを漕ぎ始めた。バーニャー夫人は男の顔つきを観察しながら、じっと座っていた。日没の光が彼の顔を正面から照らし、けばけばしいほどの輝きで包んでいた。西の空を背にした彼女の顔つきは陰になり、どこを向いているのか男にはまったく分からなかった。

「この土地を離れたらいかがですか？」と彼女はとうとう言った。

「この土地を離れる！いったいどうやって？」と彼は顔を上げながら答えた。そこにはこの階級の人間が自分の関心に触れた提案を耳にするときの荒々しい貪欲さがあり、その影響は信用の置けない熱意が持つ最も情け深い提案にまで及んでいた。そしてそれは経験と一緒にあって、取り引きについては自分たちの利益を守れと彼らに教えていたのである——しかしそれが

彼らに理解させることができる彼女の唯一提案の形だった。

「どこか他の土地に行くのです」とホーテンスは言った。

「たとえば、どこに！」

「新しい国です——たとえばアメリカ。」

男は突然大声で笑った。バーニャー夫人の表情は、ふつう自分が嘲笑の対象になったときに感じる気まずさよりも、彼の表情の動きに関心を持ったことを示していた。

「何てバカげた考えだ！もしあちらに家具つきのアパートを用意してくれたら、それ以上のものは望みませんよ。でも、向こう見ずな行為はごめんですぜ。失業中でぶらぶらしているときには、アメリカやアルジェリアという言葉は空いた腹に詰め込むにはもってこいだ。パイプに煙草の葉を詰めて煙が頭の周りを回るようにね。でも、その言葉はカツやワインボトルの前で消えてしまうのさ。潮がきれいに引いて空気がきれいで、その棧橋からアメリカの海岸が見えたら、そのときには荷物をまとめませ。それより前はだめだ。」

「怖くて危険を犯せないってわけね？」

「怖いものなんてありゃしませんよ、俺には。でも俺はバカでもないからね。新しい靴が手に入るまで、今の靴を捨てたりしませんよ。ここなら裸足でも大丈夫だけどね。陸があると思っただころで水を見つけたくはないからね。アメリカって言ったっけ。俺はもうアメリカには行ったことがありますぜ。」

「そう！行ったことがおありになって？」

「ブラジルにも、メキシコにも、カリフォルニアにも、西インド諸島にもね。」

「そうなの！」

「アジアにも行ったことがありますぜ。」

「そう！」

「中国やインドにもさ。ああ、世界中を見てきたさ。喜望峰をもう三回も往復したのさ。」

「それでは船乗りだったのですね？」

「そうでさ、奥さん。十四年もね。」

「どの船でしたの？」

「そうだね。五十隻にはなるね。」

「フランスの船ですか？」

「フランス、イギリス、スペイン……たいていはスペインの船だったね。」

「そうですか？」

「ああ。俺はもっと愚かだったのさ。」

「どうして？」

「へっ、犬みたいな生活だったさ。俺が見たような卑劣な芸の半分でもする犬がいたら俺はそいつを慈悲心から沈めてやるね。」

「そしてあなたもその手を染められたのかしら？」

「何ですって、俺はやられたことをやり返しただけさ。俺は善良なスペイン人や偉大な悪魔と変わらないさ。俺は最高のナイフ使いを相手に、同じくらい速くナイフを抜き、同じくらい深くナイフを突き刺したさ。ご婦人じゃなかったら傷を見せてあげるがね。でも言っとくけど、俺の体にある傷と同じだけの傷がスペイン人のケツにはあるのさ！」

思い出のおかげで元気を取り戻したかのように男はボートを漕いだ。短い沈黙があった。

少したってバーニャー夫人は言った。「お考えになる？というか、覚えてらっしゃる？つまり、人を殺した記憶がおありになって？」

一瞬、男のオールを漕ぐ手がゆるんだ。彼は鋭い一瞥を女性の顔に投げかけた。しかし、彼女の顔はまだ陰になっていて表情が読み取れなかった。彼女の質問の調子は単なる何気ない好奇心を示していた。彼は一瞬とまどったが、あの意識的で用心深く疑うような笑みを浮かべた。その笑みは彼が人を殺したという事実を隠すか、あるいはまた、その事実を否定することから生じる罪悪感を隠すものだった。

「おやおや！」と大きく肩をすくめて彼は言った。何というご質問だ！……俺は理由もなしに人を殺したことはないよ。」

「もちろんですわ」とホーテンスは言った。

「しかし、俺の知る限り、南アメリカの理由はここでは理由にならないだろうけどね」と男は言った。

「そうでしょうね。あそこではどういうことが理由になりますの？」

「そうだね。仮に俺がバルパライソで人を殺したとして——言っとくけど殺したとは言っていないよ——それはナイフが思ったより深く入ったからっていうことかな。」

「しかし、そもそもなぜナイフをお使いになったの？」

「使ってないよ。もし使ったとしたら、それは相手が俺に向かってナイフを抜いたからさ。」

「ではなぜその人はナイフを抜いたのかしら？」

「分かりきったことさ。港にある悪だくみと同じくらい多くの理由さ。」

「たとえば？」

「そうだね。たとえば、彼が狙っていた船会社の仕事を俺が取るとかね。」

「そんな程度のことで？人を殺す理由に？」

「ああ、もっとささいなことでもね。女の子がある男に約束した一ダースばかりのオレンジを俺にくれたとかね。」

「何て妙なんでしょう！」とかん高い声で笑いながらバーニャー夫人は言った。「その程度の恨みを持った男がやって来て、あなたを刺して何とも思わないということかしら？」

「その通りさ。呪いの言葉とともにナイフを柄のところで背中へ突き刺して、五分後には歌をうたいながらそのナイフでメロンを切るのさ。」

「それで、その男が臆病だったり、面目をつぶされたり、あるいは自分で復讐ができないとき、彼は——もしかしたら女性かもしれないけど——その女の子のせいで誰か他の人にそんなことをやらせるのかしら？」

「もちろんさ。そんな仕事を探している奴が南アメリカの海岸にはここにいる物乞いと同じくらいいまさ。」ボートの男はこんなにも淑女然とした女性がこんな品のない話題にひどく興味を持っていることにとても驚いた。しかしご覧のとおり、彼女がこの話題について容易に話すのを聞いて、多分、この女性に情報を与えることができる楽しみとそれを話している自分自身の声を聞く楽しみは驚きよりもさらに大きかった。「あの土地では人は絶対に恨みを忘れないのさ」と彼は続けた。「もし彼が一日借りを返せなくても、別の日には必ず借りを返しまさ。スペイン人の憎しみは寝不足のようなもので、しばらくは先延ばしにできるが、最後にはそいつに捕まっちゃうんです。悪党って奴は自分たちへの約束はかならず守るんでさ……船の上の敵はまったく楽しいもんでさ。同じ囲いの中でつながれている雄牛のようなもんで。壁を後ろにしてなきゃ三十秒と安心していられるもんじゃない。たとえ相手が仲良くしようとしてきても、相手の好意にはどこか下心があるのさ。そいつと何かするってのはしろめ製のカップで酒を飲むようなもんでさ。スペイン人の通り道に影を一度ちらつかせると、奴らは常にそれをそこに見つけるのさ。奥さんがこの品行方正なヨーロッパの町にしか住んだことがないのなら、南アメリカの港町のことなんて想像もつかないだろうよ——町の半分の間人が残りの半分の人間を通りの角で待ち伏せしているのさ。でも、俺はここがそんなにいいところだとは思わないね。みんな他人のことを詮索しているようなこの町がね。あっちではあらゆる街角で人殺しに出会うけど、ここじゃ警察官に会うからね……とにかく、何をおいても、あっちでの生活はどこで地獄のような岩に座礁するかわからない浅い水路を航行するような生活を思い出させるね。ちょうど奥さんが出入りの業者に借りがあるように、あちらではすべての男は近所の人間に借りがあるのさ。彼らが返さなきゃいけない借りはそういう借りだけでさ。俺がサンチャゴ号を去るとき船長のことをかわいい名前で呼んでやったさ。船長はそのうちそのことで俺に借りを返しに来るだろうさ。でも、奴は絶対に金は払わないのさ。」

スペイン人の美德についてのこの解説のあと短い沈黙が続いた。

「では、あなた自身は人を殺めたことはないのね？」

「ああ、もちろん、ありまさ！……恐ろしいかね？」

「いいえ、まったく。そういうことはやむを得ないということがまますから。」

男は、たぶん驚いて、しばらく黙っていた。というのは、次に彼が言ったのは「奥さんはスペインの方ですか？」だったからだ。

「そういう意味では、多分そうかも」とホーテンスは答えた。

男は再び黙った。沈黙が長引いた。バーニャー夫人が質問をしてその沈黙を破った。その質問は彼女も同じ思考のつながりをたどっていたことを示していた。

「この国では人を殺すのに十分な根拠とは何なのですか？」

男は大きな笑い声を水面に響かせた。ホーテンスは体を覆うようにコートを引き寄せた。

「残念だけどないね。」

「正当防衛という権利はないのですか？」

「もちろん、ありませ——そのことについては知っておかなきゃいけねえな。しかし、それは裁判所の奴らがさっさと片付けちまうのさ。」

「南アメリカやそういう国々では、生活を女性にとって耐えられないようなものに男がしたとき、女性はどうしますの？」

「へっ！多分、男を殺しちゃうんだろ。」

「では、フランスでは？」

「女は自殺するんじゃないか。はっはっはっ！」

気がつくと彼らは灯台のところで切れている大きな防波堤の端にまで来ていた。内港の片側の限界点だった。日はすっかり沈んでいた。

「灯台に着きましたぜ」と男は言った。「暗くなってきやした。帰りますか？」

ホーテンスは海の方を見ながらしばらくその場で立っていた。「そうですわね」と彼女はようやく言った。「帰りましょう——ゆっくりとね。」ボートがぐるっと向きを変えたとき、彼女はもとの場所に座り、ボートの縁から片手を出して、長く続くさざ波を見つめながら、ボートが進むのに合わせて水の中に手を浸けていた。

彼女はボートの男を見た。西の方に残っている光が彼女の顔を照らしていたので、男は彼女の顔が真っ青なことに気がついた。

「こんな生活にはもううんざりなんでしょう」と彼女は言った。「お力になってあげられるんですけれど。」

男はぎくっとして一瞬彼女を見つめた。それはこの発言が、彼女の目の中に彼がかすかに認めた表情を刺激したからだろうか？次の瞬間、彼は帽子に手をやっていた。

「奥様は本当に親切な方だ。何をなさるんです？」

バーニャー夫人は見つめ返した。

「あなたを信頼しますわ。」

「ああ！」

「そしてお礼をさせていただきます。」

「ええ？奥さんは俺に仕事をくださるんで？」

「ちょっとした仕事です」とホーテンスはうなづいた。

男は何も言わずに、説明されるのを待ってでもいるかのようだった。彼の表情にはがさつな男が困ったときに見せる品のない短気な感情が見て取れた。

「あなたには勇気がおありになって？」

この質問の意味が少し分かったように思えた。彼の笑みがこの質問に答えていた。男と自分を隔てている壁を犠牲にしなければ階級の違う人間とは話せない話題というものがある。立場の違いというものをまったく無くしてしまうような考え、感情、ひらめき、思考の兆候というものがある。

「奥さんが俺にしてもらいたいことなら何でもする勇気が十分あります」と男は言った。

「犯罪を犯す勇気がおありになって？」

「ただじゃダメですぜ。」

「私のためにあなたの心の平静を危険にさらし、あなたの個人的な安全をリスクにさらすことをあなたにお願いするのだとしたら、それはあなたの好意に期待してはなりません。私のために重くなったあなたの良心の十倍の重さの金を差し上げましょう。」

男は薄暗くなった光の中で彼女を長い間きびしく見つめていた。

「奥さんが俺にしてもらいたいことは分かったよ」と男はついに言った。

「結構ですわ。やっていただけるかしら？」ホーテンスは言った。

男は彼女を見つめ続けた。ホーテンスの目は、もうこれ以上隠すことは何もない女のように彼の目と合った。

「詳しく話してもらおう。」

「アルモリークという名の汽船をご存知？」

「ああ、サザンプトンから来るやつだな。」

「アルモリークは明日の朝早く着きます。船は浅瀬を越えることができますでしょうか？」

「無理だな。昼までは無理だ。」

「思ったとおりですわ。私はその船でやって来る人と会うことになっています。男の人です。」

まるで声がひるんでしまったかのように、バーニャー夫人はそれ以上話を続けることができないように見えた。

「それで？」と男はうながした。

「彼がその人なのです」——彼女は再び口ごもった。

「その人って——？」

「私がいなくなって欲しいと願っている人です。」

しばらくのあいだ沈黙があった。最初に口を開いたのは男の方だった。

「もう計画は決まっているのかね？」

ホーテンスはうなづいた。

「聞かせてもらおう。」

バーニャー夫人は言った。「その人はお昼前に着きたがっています。あなたがおっしゃるとおり船が投錨すれば、彼が帰る家は船から見えるはずですよ。もしボートが手に入ったら彼は必ず先に上陸しようとしています。そこで！——お分かりになるわね。」

「ああ！俺のボートのことを言ってるんだな——このボートのことだな？」

「ああ！」

バーニャー夫人はその場で立ち上がり、腕を投げだしてまた座った。顔を両膝にうずめていた。男は急いでオールを取り付けて両手を彼女の肩に置いた。

「さあ、頼むから、気を確かに持って。俺たちの話合いはつくから」と彼は言った。

ボートの底に膝をつき、彼女をつかんで支えながら、顔はまだうつむいていたけれども、彼は何とか彼女を起き上がらせることができた。

「このボートで殺って欲しいんですかい？」

彼女は何も言わなかった。

「男は老人かい？」

ホーテンスはかすかに首を横に振った。

「俺くらいの年かい？」

彼女はうなづいた。

「何だって！そりゃやさしい仕事じゃねえな。」

「彼は泳げないの」とホーテンスは顔を上げずに言った。「彼は——足が不自由なんです。」

「何てこった！」とボートの男は両手を下ろした。ホーテンスは素早く顔を上げた。読者の皆さんにはパントマイムの意味がお分かりになっただろうか？

「気にしなさんな」とついに男は言った。「目印にはなりません。」

「ええ。しかも、彼は波止場が延長されたところにあるバーニャー家へ連れて行ってくれるよう依頼すると思います。その家のすぐ裏にまで水が来ています。ご覧になって。ここからでも何とか見えますわ。」

「場所は分かってまさ」と男は言ったが、自分自身に問いかけ答えているように黙っていた。

ホーテンスは男が考えていることが分かったので、それをさえぎろうとしたとき、男が先に言った。

「この件では俺はどこまで信用していいのかな？」と男は聞いた。

「報酬のことですか？私も考えていました。この時計はあとで私が喜んでお支払いできるものの誓いの印です。この時計には二万フラン分の真珠が埋め込まれています。」

「金額について話合わなきゃいけない」と男は時計には触らずに言った。

「それはあなたが決めて下さって結構ですわ。」

「そりゃいい。結構高額になる覚悟はおありだね。」

「もちろんです。さあ、言ってちょうだい。」

「俺が奥さんの提案について考えるのは大金が手に入るという前提があるからだけ。奥さんが俺に頼んでいるのは殺人だということはお分かりだね？」

「それで金額は——金額は？」

「ところで」と男は続けた。「密漁はいつも高くつきますぜ。その時計の真珠はそれを手に入れるのに男一人分の命がかかってますから高価ですな。奥さんは俺にあなたの真珠採りになれて言うんですな。それならそれでいいだろう。それなら奥さんは俺が安全に潜れるように保証してくれなきゃ——潜るんだ、そうだろう——はっ！——奥さんは俺が安全なように武装してくれなきゃ。俺が仕事をしている間に息ができるようなちょっとした隙間があるんだよ——安心できるようなちょっとした何かがある！」

「ねえ。私はあなたとお話をするつもりもないし、あなたのおしゃべりを聞くつもりもありません。私は単にあなたのおっしゃる金額を知りたいだけです。にわとりを二羽ばかり買うのに値引きの交渉をするつもりはありません。金額をおっしゃって下さい。」

男はすでに腰を降ろしてオールを漕ぎ始めていた。彼はオールを精いっぱい伸ばして力一杯引いていた。そのために、彼の顔と夫人の顔が真近くで向き合った。彼の体は前かがみになり、彼の目はバーニャー夫人の顔を見つめていた。彼はこの姿勢をしばらく保っていた。多分、彼女が美しい女性だということは、この瞬間幸運なことであつたに違いない——それは今までにもしばしば彼女が目的を達成するために役立つ*。もし彼女の顔が醜ければ胸の悪くなるような交渉の性質を際立たせてしまっていただろう。突然、素早く激しい動きで男はオールを引いた。

「なかなかやるね！奥さんの方から言ってみな。」

「結構ですわ、あなたがお望みなら」とホーテンスは言った。「そうですわね……私に差し上げられるものを差し上げますわ。私は一万五千フランの価値のある宝石を持っています。それを差し上げますわ。もしそれが面倒なことになるようでしたら、それと同じ価値のものを差し上げます。自宅の箱の中に金で千フランあります。それを差し上げましょう。アメリカへ行くための旅費や必要なものについてもお支払します。ニューヨークに友人がいますから、何か仕事に就けるよう手紙を書きます。」

「それで、俺の母親と妹には奥さんのところの洗濯女をよこすってわけですか？はっ！はっ！宝石、一万五千フラン。あと千フランで一万六千フラン。アメリカ行きの旅費——ファーストクラス——五百フラン。それに必要なもの——必要なものって言うけど、奥さんはどういうものを考えているんかね？」

「あなたのアメリカでの成功に必要なものすべてですわ。」

「俺が殺人者ではないということを書面にしたものでですか？まあ、殺人者だという印象は残しておいた方がいいかもしれねえな。少なくとも海のこっち側じゃあそれは俺にとっちゃ都

* 彼女の笑みには抵抗できない魅力があるとされていた。どんな残酷な心の持ち主をも同情で埋めることができるような絶望的な顔つきを、彼女は悲しみの中においても自由に表現することができ、最も心優しい人の気持ちさえ残酷な目的のために勝ち取ることができたそうである。

合がいいんだ。二万五千フランだ。」

「分かりましたわ。でも、それ以上は一スーでもお断りします。」

「あんたを信頼できるかね？」

「私はあなたを信頼してなくて？私の冒険について私はあまり考えない方があなたにとっていいのです。」

「たぶん俺たちはおあいこだな。俺たちはどちらも間違いをしでかす余裕などないんだ。俺もあんたを信じるぜ……。さあ！波止場の近くまで来ましたぜ」と彼は言った。そして、神妙に帽子に触れる真似をして「まだ墓地に行くかね？」と尋ねた。

「急いで来て。陸に上げてちょうだい」とバーニャー夫人はいらいらして言った。

「俺たちはある意味死者の中にいましたぜ」と夫人に手を貸しながら彼は言った。

III

バーニャー夫人が家に帰ったのは八時を過ぎていた。

「ド・メイロー氏はお見えになった？」と彼女はジョゼフィーヌに尋ねた。

「はい、奥様。奥様がお出かけだと知ると、ご主人様のお部屋にメモを残して行かれました。」

ホーテンスは夫の古い書斎の上に封がしてある手紙を見つけた。そこには次のように書かれていた。

「君が外出していると知ってがっかりしたよ。君に伝えたいことがあったんだけど。C—一宅に夕食の招待を受けて夜を過ごすことにしたよ、世間体を考えてね。それと同じ理由で、僕はこの問題と正面から取り組む決意をしたんだ。帰りにはバーニャー氏の帰宅を歓迎するために蒸気船に乗り込むことにしたよ——古い友人の特権として。アルモリークは夜明けまでに港口に停泊すると聞いた。君はどう思うかね？しかし返事を聞くには遅過ぎる。私の能力を讃えてくれたまえ——いずれにせよ、最後にはそうすることになるのだ。どんなに事がスムーズに運ぶか見ていたまえ。」

「何てことでしょう！何てことでしょう！」と手紙を読んだ夫人は吐き捨てるように言った。「ああ神様どうか私を救って下さい。」彼女は部屋の中を数回行ったり来たりした。そしてとうとう、強く感情が高ぶっているときに人がよくするようにぶつぶつと独り言をつぶやき始めた。「ああ！でも彼は決して夜明け前には起きないわ。特に今夜のような夕食の後には彼は寝過ごしてしまうに違いないわ。そしてあの男が彼より先に……ああ、かわいそうな私の頭、最後は失敗に終わってしまうことのためにこんなにも苦しんでしまっ！」

ジョゼフィーヌが奥様の身の回りのものを片付けるために再び上がって来た。バーニャー夫人は自分を落ち着かせようとして最初に頭に浮かんだ質問をした。

「ル・コント氏はお一人だった？」

「いいえ、奥様、もう一人男性の方がいらっしゃいました。確かド・ソールジュ氏とおっしゃる方でした。お二人は貸馬車でお越しになられて旅行かばんを二つお持ちでした。」

ここまで私は、フィクションの前提となっていることを侵害しているという誇張された恐れから、この気の毒な女性が考えたことではなく、彼女のしたことや言ったことを読者の皆さんにお伝えすることが最善だと考えていたけれども、ここでは彼女の頭の中によぎったことをお伝えしようと思う。

「彼は臆病者なのかしら？彼は私を置いて行くつもりなのかしら？それともただ単に最後の三時間を飲んで騒いでいるだけなのかしら？私と一緒に時間を過ごしてくれてもよかったのに。ああ、私の愛しい人よ、あなたは私のためにほとんど何もしてくれないのね。私はあなたのためにこんなことまでしたのに、人殺しまで、そして——ああ、どうか神様！——自殺まで！しかし、どうすれば一番いいのか彼はよく分かっているはずだわ。とにかく、彼は今日の夜を特別な夜にするつもりなんでしょう。」

その日夜遅く料理女がやって来たとき、寝ずに彼女を待っていたジョゼフィーヌは言った。「奥様がどんなご様子か信じられないわ。今朝から十歳もお歳を召したかのようよ。何てことでしょう！奥様には何という日だったのでしょう！」

「明日まで待ってごらんよ」と予言者のバレンタインは言った。

その夜、二人が屋根裏部屋へ上がって行ったとき、ホーテンスのドアの下から明かりがもれているのを見た。そしてその夜、ホーテンスの上に部屋があるジョゼフィーヌは（奥様に同情して、と言っておこう）階下でする物音を聞いていた。それはホーテンスがジョゼフィーヌ以上に眠れなかったことを示していた。

IV

次の日、夜明け早く、アルモリークがH——港の外に停泊したとき、ちょっとした騒ぎがあった。コートを着て杖をつき小さな旅行かばんを持った男性が小さな船つり用のボートでアルモリークのそばまで来て、乗船の許可を得ていた。

「バーニャー氏は乗っておられるかね？」と彼は最初に会った船員の一人に聞いた。

「バーニャー氏はすでに陸に上がられたと思います。数分前、一人の船乗りが氏を訪ねて来ましたから、彼がバーニャー氏を乗せて行ったんだと思います。」

ド・メイロー氏は一瞬考えた。それから彼は陸の方を見ながら船の反対側に回った。船の柵にもたれかかると、船に上がって来るための梯子につないである空のボートが見えた。

「あれは町のボートだね？」とそばに立っている乗組員の一人に尋ねた。

「そうだと思います。」

「船長はどこだろう？」

「しばらくすれば戻って来ると思います。彼がたった今船員の一人と話しているのを見ましたから。」

ド・メイロー氏は梯子を降りて行き、ボートの後ろに座った。彼が話しかけた乗組員が彼のバッグを手渡していると、赤い帽子をかぶった男の顔が柵の上から見えた。

「やあ！」とド・メイロー氏は答えた。「これは君のボートかね？」

「はい。何なりとお役に立ちます」と、梯子の最上段までやって来た赤い帽子の男は、その男の杖と旅行かばんをじっと見つめながら答えた。

「新しい波止場の端のバーニャー夫人のお宅まで乗せて行ってくれるかね？」

「かしこまりました」とボートの男はあわてて梯子を降りながら言った。「お客様こそ私どもの望む方でございます。」

一時間後、ホーテンス・バーニャーは家から出て来た。そして、ゆっくりと庭を歩いて海を見下ろすテラスの方に向かって歩いていた。女中たちが朝早く下りて来たとき、彼女はすでに目を覚ましており着替えを済ませていた。というより、どうやら洋服を脱がなかったようだった。というのも、彼女は昨晚と同じ服装をしていたからだ。

「あら！」ジョゼフィーヌは彼女を見て叫んだ。「奥様は昨日十年もお歳をお召しになったわ。そして、夜の間にもまた十年お歳を召されたわ。」

バーニャー夫人が庭の中央まで来たとき、彼女は立ち止まり、耳をそばだて、一瞬動きが止まった。次の瞬間、彼女は大きな叫び声を上げた。テラスの下から人影が現れるのが見えた。彼は足を引きずりながら両手を拡げて彼女の方に向かって来た。